

軍隊生活

岡田良平さん

昭和19年の夏、大東亜戦争の戦火は、激しさを増していた。

私は、今の韓国釜山の第七小学校で徴兵検査を受けた。判定官から「第一乙種合格」の判定を下され、当時では名誉な帝国軍人の卵が誕生したのである。人々の励ましに答え、「大東亜戦争の激しくなる中で、軍人として召されることを光栄に思い、大日本帝国の防波堤になる覚悟で戦ってきます」と決意を述べ、祝入営のタスキを掛け、奉公袋を持ち、万歳の声に送られ集合場所に向かった。敬礼をして両親や見送りの人に別れを告げ、点呼を受けて携行品を受け取った。ベルトは布製、帯剣の鞘は竹製、背囊は無く、驚いたのは水筒が竹製で、銃は38式という様にならない帝国軍人の姿であった。物の不足が軍人にまで及んでいることを感じた。号令と共に進軍ラッパが鳴り、120名余の隊列が校門を通過して大庁町の坂道に出た。万歳の声が聞こえて振り返ったが、既に校門は閉じられ、腕章をした憲兵が立っていた。私たちの隊列は電車通りに沿って、釜山駅を過ぎ栈橋に着いた。

その日の夜中に出航し翌朝下関港に停泊。行先も知らされないまま、直ぐに窓のない貨物列車に詰め込まれ徳山駅に着いた。駅から櫛ヶ浜にある兵舎まで歩き、それぞれ各班に配属され、翌日の計画、日課、規律、注意事



項等を聞いて床に就いた。軍人としての初夜、これからのことを考え、目をつむっても寝付かれず、色々な思いが巡り、巡回の足音を幾度聞いたことか。翌朝、初年兵集合が掛かった。部隊長が式台に上がるのを見て号令を掛け、私は駆け足で部隊長の前に立ち、「申告します。岡田二等兵ほか125名は、4月13日付けをもって、船舶1215部

隊に入隊を命ぜられました。ここに謹んで申告します。」と申告，ここに大日本帝国軍人が誕生したのであった。翌日から初年兵教育が始まった。学校時代の教練の繰り返しがほとんどで，苦とは思わなかった。特に，船舶兵であったので，手旗の訓練は厳しかったが，海洋少年団で手旗は鍛えられていたのですぐに覚えて慣れた。覚えの悪い者には容赦なく体罰があった。海辺に近い兵舎だったが，訓練中に一度も船に乗ること無く，行方も知らされず下関に移動した。

ある日のこと，曹長⁽⁵⁾から指揮班に入るように言われ，部隊の事務を執ることになった。指揮班では恵まれていたが，班に帰ると，人格も人権も問答無用で，個人の行動がその時々上官の目にどの様に映ったか，上官の心情がどうであったかで体罰が行われた。それは「上官の命は天皇陛下の命である。」と言う軍人勅諭⁽⁶⁾が絶対的な規範としてあるからである。またある日，空襲警報が発令され，暗闇の中を完全武装して集合した。この警報が鳴ってから時間は経っていないのに，もう豊後水道側からB29が山の上に飛来しており，サーチライトに照らし出され，あちらこちらから砲火の赤い塊が火花のように交差しながら敵機を追っていた。突然，照明弾が落とされ真昼のように街並みが映し出されると，あちらこちらから火の手が上がり，炎が関門海峡の海面に映り余計に被害の大きさを感じた。応戦する我が軍機も対空砲火もなく⁽⁷⁾，明かりを消してじっと耐えて敵機の行き過ぎるのを待つ防空体制を見せつけられ，戦争がこんなに身近に迫って来ていると実感した。

下関での生活も僅かな期間であったと思う。また行先も知らされず，貨物列車に乗せられて萩^{はぎ}へ移動した。初めて軍隊が来たと言うことで，沿道には多くの人が日の丸の小旗を振って出迎え，緊張もしたが誇らしくも感じ町を行進して宿舎に落ち着いた。昭和20年5月頃は，既に日本の空と海はほとんどアメリカに制覇されていた。当時，物資食糧等の不足は満州・朝鮮からの海上ルートで輸送されており，輸送基地で朝鮮に近い港は爆撃され使用不能だったため，西日本で軍事物資の中継地として使用可能な萩^{はぎ}港が選ばれた。私たち船舶部隊の役目は，この港から徴用された機帆船と乗組員で編成され⁽⁸⁾

た輸送船団を護衛し、物資を陸揚げして目的地に送り出す荷役作業であった。⁽⁹⁾船倉から大豆の袋を2人掛りで持ち上げ、人の背中に乗せて運搬させるため、袋に穴が空き大豆がこぼれ出すことがあった。当時、⁽¹⁰⁾耐乏生活を強いられていた国民には、このこぼれた大豆でも貴重な食料源で、運搬が始まると競って破れた袋を目当てに人が増えてくる光景を見ると、食糧事情の⁽¹¹⁾窮乏を実感し、わざと穴を広げ大豆を落としながら重い袋を背負って歩いたことを思い出す。

終戦間近のころは、朝鮮海峡も⁽¹²⁾風雲急を告げていた。運搬船の入港もたまにしかなく、したがって運搬作業もたまであり、兵隊の士気を鼓舞するため銃剣術の大会があったのを覚えている。8月1日付けで幹部候補生の発表があり、私は5名の技術幹部候補生の1人に選ばれ、一躍4階級上の⁽¹³⁾伍長の襟章と座金が軍服に輝いた。発表の時の話では、技術幹部候補生は広島⁽¹⁴⁾の陸軍工廠で訓練を受けると聞いていたが、全員が^{はぎ}萩市の対岸の越ヶ浜の旅館に集められ訓練が始まった。そこで「広島に黄色の爆弾が落とされたそうだ。」という話を聞いたが、それが原子爆弾であった事などは知らされなかった。

それから、終戦の玉音を聞くことも無く、かやの外で終戦の知らせを聞き、意気に燃えていた候補生たちは嘆き、血の気の多い仲間が「1人になっても戦うのだ。」と信じられず迷っていた者もいた。9月8日に解散式が行われ⁽¹⁵⁾除隊になり、これからどうすれば良いのか何処へ帰れば良いのかと、頭はいっぱいであれこれと迷った。生きて帰れないと思って入隊したのに、戦場にも行かず、内地にいても爆撃に合うことも無く、幸い生きていた。しかし、敗戦で、生まれ育ち家族と再会できた釜山はすでに外国で、日本人は引き揚げねばならず、惨めな家族全員のゼロからの出発が待っていたのである。生きることの苦しさで、生きて帰ったことを恨んだこともあった。引き揚げ当時は生きることが第一で、戦争がいかに愚かであったかを感じ戦争を憎んだのは、時間が経ちいろんな話や情報を知ってからだったと思う。

戦争は前線で戦う軍人ばかりではなく、広島・長崎の原爆をはじめ、沖縄での戦い、本土空襲でも非戦闘員の多くを殺し、また、相手国の軍人も非戦闘員も被害をこうむる

のであって、いかに戦争が愚かで惨めであることか。

.....

- 1 入営...兵役義務者または志願兵が、軍務に就くために兵営（軍人が集団で居住する所）に入ること。
- 2 奉公袋...召集の際に兵士が持参する袋で、印章、軍隊手帳、貯金通帳、遺書、遺髪、召集令状などの入営に際して必要なものを入れて携行した。
- 3 背囊...軍人・学生などが物を入れて背に負う方形のカバン。皮・ズックなどで造る。
- 4 38式...三八式歩兵銃。明治38年に正式化された旧日本陸軍の歩兵銃。
- 5 曹長...軍の階級の一つ。下士官の中では最上位の階級。軍曹の上。
- 6 軍人勅諭...明治15年(1882)明治天皇から陸海軍人に与えられた勅諭。旧陸海軍人の精神教育の基本とされた。
- 7 対空砲火...航空機に対して行われる、火砲による攻撃である。
- 8 機帆船...発動機と帆を備えた小型の木造船。
- 9 船倉...艦船内の上甲板の下の、貨物を積み込むところ。ふなぐら。
- 10 耐乏...物資の乏しい状態を耐え忍ぶこと。
- 11 窮乏...金や物品が不足して、生活に困ること。
- 12 風雲急を告げる...今にも大きな変動が起きそうな、さしせまった情勢であること。
- 13 伍長...軍の階級の一つ。下士官の中では最下位の階級。軍曹の下。
- 14 工廠...軍に直属し、兵器・弾薬を作る工場。
- 15 除隊...軍人が負傷・兵役の満了、あるいは懲戒などにより、軍隊を辞めること。退役ともいう。